

絵 本

『ジョン万次郎の生涯』より

津本陽「椿と花水木 万次郎の生涯」あらすじ

伊藤三喜庵

(求龍堂刊)

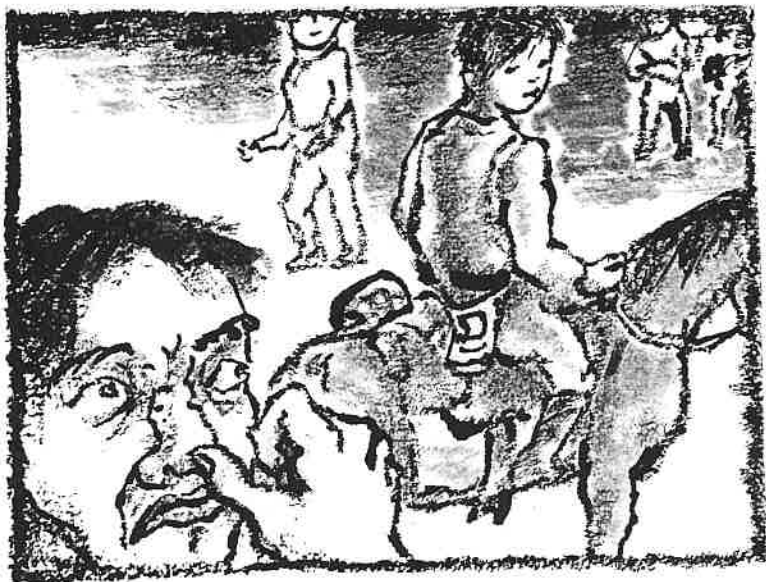
花水木の花がさわやかな六月のフェアヘブン





一八二七年、万次郎は土佐中ノ浜の漁師の家に生まれた。幼くして父を亡くし、家族の中で唯一人の働き手として、九歳から村年寄の家に下働きに出ていた。十四歳の時、偶然のことから、叔父の口ききで、宇佐浦の船頭筆之丞の鯉舟に乗り組むことになる。しかし、漁に出た船は嵐にあい、黒潮に流されやつと無人島に漂着した。万次郎たちは、五ヵ月にわたる無人島の命からがらの生活の後、たまたま通りかかった一隻の異国船に助けられる。この時から、彼の運命は大きく変わるのだった。万次郎以下五人を救った船は、世界の海に出漁するアメリカの大型捕鯨船ジョン・ハウランド号であった。キャプテンのホイットフィールドにみこまれた万次郎は、筆之丞たちとホノルルで別れ、アメリカの文化と捕鯨法を学ぶため、この船の乗組員になることを決意する。荒波を生きぬいてきた男たちは、彼に好意を示し英語、手鋸打ちを

町では人種差別も



教えこんだ。いつしか彼は船の名をとって、ジョン・マンと呼ばれるようになっていた。

船は長い航海を終えアメリカ本土ニューベツドフォードに帰航した。アメリカに住むことを決めた彼は、フェアヘブンにあるキャプテン夫妻の農場へ養子として迎えられた。時には人種差別に心を痛める事もあったが、多くの人々は彼に親切であった。アメリカ人の友人も出来、共に難関の試験を突破し、航海士の学校へも入学した。万次郎は何かにつけこの国の自由と平等の精神に驚嘆した。また、キャサリンという女の子と出合い初めて恋をするのだった。

万次郎は優秀な成績で学校を卒業し、さらに自分を高めるため樽造りの苦しい修行も終えた。そんなある日、元ハウランド号の乗組員テイビスがフランクリン号という捕鯨船のキャプテンになったので一緒に船に乗らないかと彼を誘う。航海に出れば三年は戻れぬと思った万次

カリフォルニアの金鉱に向かう



郎は愛するキャサリンの希望を入れ、正式に結婚した。そして再び海へ。この航海はとて厳しく、船長デイビスは気がふれ仕事も出来ず、人並みはずれた勇気と技術をかわれた万次郎は急遽副船長一等航海士に選出された。名譽と収穫を手にキャサリンとの再会を待ちきれぬ思いで帰航した彼に信じられぬ様な悲報が待っていた。キャサリンが海で行方不明になったというのだ。最愛の妻を失った万次郎は、悲しみにうちひしがれ、日本への帰国を決意した。そして、その資金を稼ぐためゴールドラッシュでにぎわうカリフォルニアの金鉱に向かった。荒くれ者たちの間で金を掘り、資金をためたのち、アメリカの商船でホノルルへと向かう。それは、土佐の仲間たちと一緒に日本へ連れて帰るためであった。

ホノルルで別れた五名のうち、病死したものと永住を希望した二名を残し、万次郎以下三名

黒船の情報は日本をゆすぶった



での帰国となった。日本上陸用のボートを買いいよいよ上海行きの商船に乗りこんだ。土佐を出てまさに十年目、万次郎たちは琉球への上陸に成功したのだった。

異国の装束をした彼らは、沖縄、薩摩、土佐で何回もの調べを受けた。しかし、ついに、生まれ故郷中ノ浜に帰ってきたのだった。母子が抱き合う様子を見て村人たちは貰い泣きをした。そこではまた万次郎は自分自身の墓に對面し、言葉を失うのであった。

一八五三年、ペリー率いる四隻の黒船が、浦賀にやって来た。幕府は江川担庵(太郎左衛門)の献言により、アメリカに詳しい万次郎を土佐藩から召し出した。彼のアメリカでの見聞と知識は幕府への貴重な助言となった。幕府は万次郎を幕臣とし担庵の屋敷に住ませた。

一八六〇年幕府は条約批准のため遣米使節を送ることになり、その随行艦咸臨丸の通訳とし

江川担庵にすめられ万次郎結婚

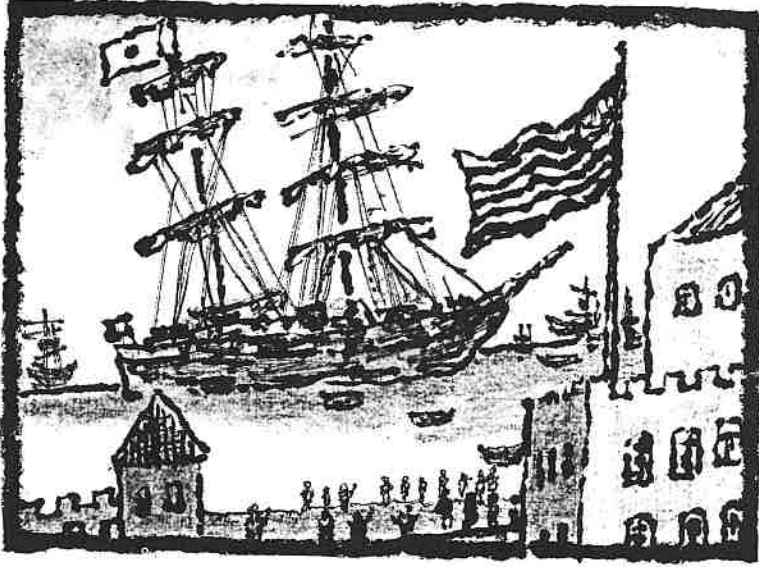


て万次郎を加えた。木村撰津守が提督、勝麟太郎（海舟）が艦長であった。またブルック大尉以下十数名のアメリカ海軍も同乗した。出航してまもなく荒天にみまわれたが、万次郎は通訳としてだけではなく、ブルック大尉とともに航海のことに力を尽した。アメリカで咸臨丸の日本人たちは大変なもてなしを受け無事帰国した。

帰国後万次郎は、日本で初めてアメリカ式捕鯨を行なったり、薩摩藩に召かれ航海術を教えたりして、アメリカで得た知識を大いに活かした。

年月は流れ幕府が倒れ、年号が明治、江戸が東京と変わり、西欧文化の導入がなされる様になっていった。四三歳になっていた万次郎は政府の使節としてヨーロッパへ向かう途中、なつかしいアメリカのフェアロップへ立ち寄った。キヤサリンの家が見える。キャプテンの家も。そ

咸臨丸、サンフランシスコ湾に入港



してあのキャプテン夫妻と感激の再会を果たすのだった。

その後中浜万次郎は東京に戻ったが世間と交わることなく閑居をつづけていた。そして一八九八年七歳で、その波瀾に満ちた日米交流という大きな歴史を創った人生を閉じるのだった。



## 伊藤喜三郎（三喜庵）略歴

1914年東京に生まる。1930年独立展などに出品を始める。1938年日本大学工学部建築学科卒業。1948年より数年、日本大学工学部講師。1952年伊藤喜三郎建築研究所設立。1961年洋画より墨絵に転向。1963年より数年、東北工業大学客員教授。1964年三越本店にて個展。以後個展多数。1971年日本南画院にて文部大臣賞受賞。1983年より文藝春秋、講談社などの挿絵を始め、1991年より2年間、読売新聞連載小説、津本陽『椿と花水木』の挿絵を描く。水墨画関連の著作として数冊、中に『三喜庵墨絵』（求竜堂）、『三喜庵墨絵画集』などがある。現在伊藤喜三郎建築事務所会長、東京都建築事務所協会名誉会長、日本自由画壇理事長。

